

## 今年度発掘調査の紹介

### おがくち 大角地遺跡

(糸魚川市大字田海字田海)

大角地遺跡は、海岸から500mほど内陸の標高5m弱の台地上に位置し、東を姫川、西を田海川に挟まれています。北陸新幹線建設に伴い平成17年9月から11月にかけて、1,152㎡の発掘調査を行いました。その結果、より高く安定した台地上に、縄文時代草創期から室町時代にかけて断続的に人々が暮っていたことがわかりました。

遺跡の最盛期を迎える縄文時代前期前半(約7,000年前)の竪穴住居や土坑からは、磨製石斧、石製装身具が多数出土しました。木の伐採・加工に使われた磨製石斧には硬く重い蛇紋岩が、石斧の原石を打ち欠きながら形作るハンマーには蛇紋岩より硬く重い翡翠が、石斧の刃を研ぐ砥石には砂岩が用いられました。とりわけ翡翠製ハンマーは翡翠利用の初例とみられ注目されます。また、勾玉・管玉・垂玉や玦状耳飾などの石製装身具には、曲面を磨き出したり孔をあけたりするために、軟らかく加工しやすい滑石が利用されました。しかしながら滑石は割れやすく、孔をあける際に破損してしまったものが多く出土しています。滑石は山の露頭から採取されたものとみられますが、その他の原石は遺跡近くの海岸で容易に拾うことができます。当時の人々は、豊富な石材の特性を熟知し、目的ごとに使い分けていたようです。

また、出土した磨製石斧や石製装身具の多くは、未完成品や製作途中の失敗品で、完成品はわずかでした。完成品は交易品として他地域に持ち運ばれたため、遺跡に残されなかったものと考えられます。その一方で、本遺跡からは信州産とみられる黒耀石が出土しており、当時の人々の幅広い交易をうかがい知ることができます。(杉田和宏)



滑石製の垂玉・勾玉



製作工程がうかがえる滑石製玦状耳飾



蛇紋岩製磨製石斧や原石

ながおもてひがし

## 長表東遺跡

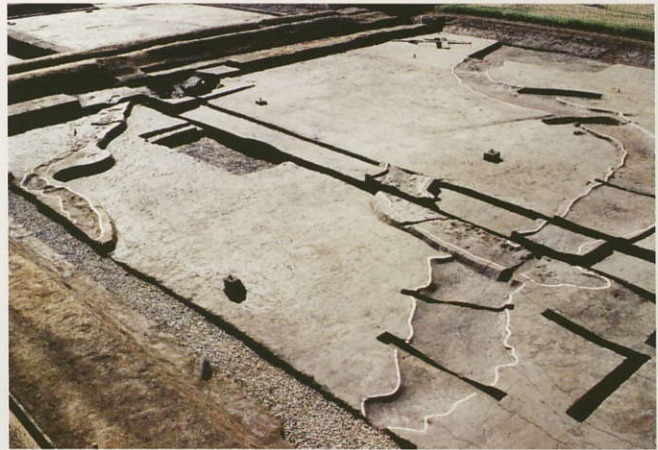
(南魚沼市小栗山字長表322-3ほか)

長表東遺跡は南魚沼市に所在し、庄之又川と鎌倉沢川の形成する扇状地間の低地に立地しています。国道17号六日町バイパス建設に伴い、平成17年8月～10月まで2,650㎡を調査しました。調査の結果、弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡であることが分かりました。

遺構は土坑、ピット、溝などが検出されました。これらの遺構は周辺よりも標高のやや高い調査範囲西側に多く位置しており、微高地上での活動がうかがわれます。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器や土師器が出土しました。このうち弥生時代後期の土器は東北地方の影響を受けたものです。古墳時代前期の土師器では甕や壺が出土しています。

長表東遺跡の周辺には弥生時代から古墳時代の遺跡が立地しています。これらの遺跡の分布から、丘陵上には古墳を築造し、丘陵の麓には集落、そして低地には水田などが配置されていることがわかります。また同じ低地でも、長表東遺跡などの微高地では、水田耕作とは異った活動を行っていたことが読み取れます。

(山崎忠良)



遺跡近景

## 西部遺跡 (05南区)

(岩船郡神林村大字牛屋字西部)

西部遺跡 (05南区) は、岩船郡神林村と同荒川町境を流れる荒川によって形成された、右岸の自然堤防の裾から砂丘後背湿地にかけて立地しています。日本海東北自動車道建設に伴い、平成17年4月から同10月まで発掘調査を行いました。その結果、古代 (7世紀前半) から中世 (14世紀後半) にかけての遺跡であることが分かりました。

7世紀から8世紀の後半までは、あまり遺物が出土していませんが、その後は、各時代に堆積したそれぞれの土層から須恵器・土師器・珠洲焼・常滑焼・青磁などが出土し、さらに近世の陶磁器や銭貨なども出土しています。

とくに、10世紀代に堆積した土層からは、たくさんの土師器と炭の小さな粒が出土したことから、近くに大規模な集落があったことがわかります。

遺構は溝や土坑が中心ですが、今回調査を行った最も古い土層からは、杭が亀の甲羅のように六角形に打ち込まれた遺構を検出しました。杭の年代測定から、およそ7世紀中頃のものと考えられますが、この頃、この周辺に「磐舟柵」が築かれたといわれ、それとの関係が、今後調査を進めていく中で明らかになるものと期待されます。

このような調査成果から周辺を見渡すと、本遺跡南の自然堤防上に広がる西部遺跡 (04) で、同じ時代のおびただしい数の遺構や遺物を検出しており、それらと密接に関係していることが考えられます。

(調査担当者：大成エンジニアリング 作田一耕)



亀甲形杭列

## 西部遺跡 (04北区南側)

(岩船郡神林村大字牛屋字西部1192ほか)

西部遺跡(04北区南側)は、日本海東北自動車道の建設に伴い、昨年度に引き続き、平成17年5月から12月にかけて延べ5,250㎡を発掘調査しました。ここでは、大型の建物が見つかった平安時代の遺跡について概観します。

平安時代の遺構は、周囲に区画溝を伴う大型の掘立柱建物2棟のほか、その周辺から製塩関連遺構とみられる炉、井戸、土坑などが見つっています。いずれも出土した遺物から10世紀前半代の遺構と思われる。

大型掘立柱建物は2棟並んで見つっています。建物の大きさはSB1400が桁行6間(13.5m)×梁間4間(9.0m)、SB1500が桁行9間(20.0m)×梁間4間(11.0m)で、これまでに県内で見つっている同時期の建物としては最大級の大きさです。建物の内部からは、鍛造鍛冶炉や直径1m前後の地床炉などが複数見つっており、屋内は作業のための土間として利用されていたと考えられます。また、建物の周囲からは漆を入れた容器やその落し蓋として使われた漆紙などが出土しています。こうした遺構や遺物の状況から、これら2棟の建物は、鉄や漆、火力などを用いて何らかの製品を生産していた工房であると考えられます。

出土した遺物は、土師器、須恵器、白磁、灰釉陶器、緑釉陶器、耳皿(土師器・緑釉各1点)、墨書土器(則天文字「天」)、製塩土器、漆器、腰帶石銚(丸柄)、水晶玉、砥石、管状土錘、輪羽口、鉄製品、鉄滓、鍛造剥片、炭化米、漆容器、漆紙などがあります。また、解読中の漆紙文書には「佐伯」「坂井」「正丁」「同郷戸主」などの文字が見え、この内、「佐伯」「坂井」については、当時の磐舟郡にあったとされる佐伯・山家・利波・坂井・余戸の五つの郷(律令制下の地方行政組織の単位)の内の二つ「佐伯郷」「坂井郷」(『和名類聚抄』)を指すものと思われる。

今後、漆紙文書の解読を含め、整理を進める中でさらに多くの情報が得られるものと期待されます。

(調査担当者：(有)山武考古学研究所 湯原勝美)



全 景



大型掘立柱建物SB1400(右)・1500(左)



SB1500区画溝内遺物出土状況



則天文字「天」

## 報告書作成中の遺跡

ひがしうら

## 東浦遺跡

(妙高市毛祝坂字東浦31ほか)

この遺跡は、長野県境に近い妙高市（旧妙高高原町）毛祝坂にあります。一般国道18号妙高野尻バイパス建設に先立ち、平成4年度に発掘調査しました。調査の結果、妙高山の火山堆積物を挟んで上層と下層で遺物が発見されました。

下層では、縄文時代前期の土器が数個体、磨製石斧が1点出土しました。土器は深鉢で羽状に縄を転がした模様がつけられています。また、土器胎土には植物繊維が含まれています。遺構は確認されませんでした。

上層では、平安時代の遺構・遺物が確認されました。幅10mほどの蛇行する旧河川跡に沿って掘立柱建物2～3棟、石組みのカマドが見つかりました。掘立柱建物のうち1棟は4×2間で、床面積は約50㎡であり大きくはありません。石組のカマドは、単独で確認されました。廻りからは土師器甕の破片が多く出土しました。遺物はほとんどが土器で、旧河川跡から多く出土しました。土師器では甕・小甕・鍋・黒色椀があります。いずれも信州地方の器形・製作技法に共通するものです。須恵器の中には遠く佐渡小泊で作られた甕・壺・杯があります。小型のものはともかくとして、大型の甕は直径が50cm以上、重さが16kgもあります。通常平野部では舟等で運ぶのが一般的ですが、付近を流れる関川は急流です。陸路で運ばれてきたのでしょうか。



旧河川跡と掘立柱建物

さかい

## 坂井遺跡

(見附市三十刈2833ほか、中江1033ほか、下屋敷3744ほか)

国道8号見附バイパスの建設に伴って、平成3・4年に発掘調査しました。遺跡は低平な沖積平野に位置し、刈谷田川によって形成された自然堤防上に立地しています。現在、坂井集落が営まれている同じ場所から、14世紀から15世紀にかけての中世の集落が発見されました。掘立柱建物15棟と井戸117基、多数の土坑・溝・柱穴が発見されています。出土遺物は、能登半島で作られた珠洲焼の播鉢や壺・甕、越前焼の播鉢や壺、地元で作られた素焼きのカワラケ、中国からもたらされた青磁の碗や皿、白磁の皿や天目茶碗などです。井戸からは曲物・箸・漆器椀・折敷など多くの木製品が出土しています。中でも播鉢が多く、当時ウドンなどの粉食が盛んであったことがわかります。また、中国産陶磁器や珠洲焼・越前焼、関西方面からもたらされた砥石や硯など日本海を通じた流通が盛んだったことをうかがわせます。

坂井遺跡の掘立柱建物は非常に規模が小さく、梁間1間、桁行2間が標準タイプで、ごく一般的な農村部の集落であったと考えられます。しかし、遺物にはごく例外的に、盤か酒会壺の蓋の可能性のある青磁破片、金属製の水滴、石製の棹秤の錘など貴重なものが見られ、周辺に存在したと言われる戦国期の坂井砦が近接していた可能性も出てきました。

(小田由美子)



坂井遺跡 平成3年度調査区全景



井戸堆積状況(埋め戻されている)

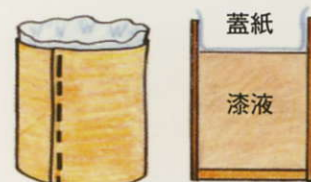
## 保存処理室から

## 西部遺跡 (04北区南側) 出土漆紙文書の調査と保存処理

日本海東北自動車道の建設に伴って行われた西部遺跡(神林村)の発掘調査の結果、平安時代(10世紀前半)の大型掘立柱建物が2棟見つかりました。建物内やこれを取り囲む溝の周辺からは、鍛冶に使われた炉や漆塗りに関わる遺物が発見され、この建物が武器・武具などの仕上げをする工房跡ではないかと推測されています。

## 漆紙文書とは?

平安時代、漆は黄金や鉄、朱(赤色の絵具)などと並んで非常に貴重な材料であったため、都に納める税の一つとして、遠くは陸奥国、上野国や越前・越中・越後国、丹波国、美濃国などから都へ運ばれ、建造物(寺院など)、食器、調度品、武器・武具などの塗料として使われました。漆の産地では、ウルシノキから採取した漆液を曲物に入れ、紙で落し蓋をして役所へ納めていました。蓋紙は漆液の表面が酸素に触れて固化したり、ホコリが入るのを防ぐためのもので、漆が染み込んでいることから、長い間土中で腐ることなく文書が守られており、私たちはこれを「漆紙文書」と呼んでいます。蓋紙には役所で不要になり払い下げられた文書(反故紙)が使われ、戸籍や税の徴収、徴兵などに関わる記録が見られます。出土した漆紙文書を解説・研究することにより、当時の社会のしくみを探ることができます。



漆を入れた曲物とその断面図

## 赤外線を利用した文字の解読

漆紙文書の多くは表面に漆が付着して黒くなっているため、肉眼では文字をはっきり読み取ることが出来ません。そこで、赤外線照射し、漆の下に隠れた文字の観察・解読を行います。



赤外線撮影装置

西部遺跡から出土した漆紙文書  
(肉眼ではまったく文字が見えません)

赤外線により浮かび上がった文字

## 保存処理

土ごと切り取って室内に運びこまれた漆紙文書は、赤外線撮影の妨げとなる表面の泥を筆や竹串などで丁寧に取り除きます。平安時代、紙は貴重品であったため、表面だけでなく裏面も使用し、さらには行間や余白に字の練習をしてから漆の蓋紙に使用しています。このため、漆紙文書の調査は表裏両面からの赤外線撮影が必要です。現在、非常に割れやすい漆紙文書の裏面を調査するため、表面に合成樹脂を塗って補強し、丁寧に土からはがして裏面の泥汚れを落として撮影・解読を進めています。今後は、これらの破片を慎重に接着剤で貼り合わせ、元の姿に還元していく予定です。

(三ツ井朋子)



裏面の洗浄

# 埋文インフォメーション

## 平成17年度出土品展報告

当事業団では、県民の皆様にご発掘の成果を紹介し埋蔵文化財に対する関心を高めてもらうことを目的に、毎年出土品展を開催し県内を巡回展示しています。今年度は県立歴史博物館（7/30～9/11）と津南町農と縄文の体験実習館なじょもん（10/29～11/23）を会場に開催しました。主な展示品は前年度発掘調査遺跡出土品ですが、今回は平成15年度出土品の一部と新たに新潟県有形文化財（考古資料）に指定された浦廻遺跡出土遺物（2会場とも）、上ノ平・吉ヶ沢遺跡出土品（県博会場のみ）も合わせて展示しました。

県立歴史博物館においては夏休み期間と重なり、見学者総数9,366名を数えました。なじょもんで津南町教育委員会による「魚沼の昔むかし」（魚沼地域発掘調査遺跡出土品）を併設展示し、見学者総数1,194名を数えました。また、両会場とも期間中に発掘調査報告と講演会を開催し（県博9/3、なじょもん11/5）、多くの参加者が熱心に聴講してくださいました。



展示解説（県立歴史博物館）



講演会（県立歴史博物館）



展示解説（なじょもん）



展示解説（なじょもん）

## 発掘調査報告会開催月変更のお知らせ

当事業団では発掘調査報告会を翌年3月に行ってききましたが、17年度以降は翌年8月に行うこととしました。調査成果についてこれまでよりも具体的に紹介できることと思います。

現在、各遺跡では遺構及び出土遺物の整理作業が進み、その性格が明らかになりつつあります。楽しみにお待ち下さい。なお、詳細は6月末頃事業団のホームページ及び「埋文にいがた」でお知らせします。

開催日	平成18年8月6日(日)
会場	胎内市産業文化会館(予定)
内容	平成17年度発掘調査報告 併 出土品展

## 埋文コラム「発掘から見えてきた縄文時代の“家”」

人々が定住を始めたのは縄文時代からと言われています。当時の人々はどのような家に暮らしていたのでしょうか。今回は縄文時代のたてあなじゅうきよ 竪穴住居とほったてはしらたてもの 掘立柱建物を取り上げました。

### 竪穴住居

地面を掘りくぼめてつくった、半地下式の住居のことです。その始まりは後期旧石器時代にさかのぼります。しかし本格的に作られるようになるのは、縄文時代以降のことです。竪穴住居は縄文時代の一般的な住居です。形は円形や方形などで、規模は直径5～10mが一般的です。直径5mの場合は約12畳、この大きさに4～5人が住んでいたと考えられています。屋根はくさぶき 草葺きかつちぶき 土葺きで、今と違って窓はありません。

写真は上越市蛇谷遺跡から見つかった竪穴住居(約3,500前年)です。直径約3.3mとやや小さめの住居です。中央には石を組み合わせてつくった炉(いろり)があり、上家を支える柱を立てたと思われる穴が4つ、方形に並んでいるのが見えます。手前に2つの穴が並んでいますが、この部分が出入り口であったと考えられます。

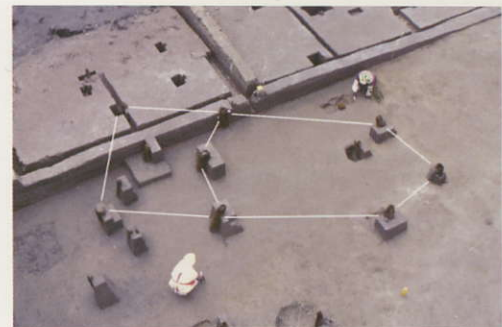
### 掘立柱建物

「掘立柱」というのは、柱の根元部分を地面に掘った穴に差し込んで柱を立て、土を埋め戻して固めることによって据えた柱のことを言います。竪穴住居の柱もこの方法で立てられています。竪穴住居との違いは平地式に建てることと、主にがけはしら 側柱で屋根を支える構造であるということです。現在の家の形に似ていますね。掘立柱建物が出現したのは竪穴住居よりも遅く、縄文時代前期(約6千年前)のことです。形は方形や長方形のほか、写真のような多角形のものもあります。規模は様々ですが、長軸5～10m、短軸2～5m程度が多いようです。竪穴住居が一般の住まいであるのに対し、掘立柱建物は集会やさいぎ 祭儀などを行う、集落の中心的な建物であったという説もあります。

写真は新発田市(旧加治川村)青田遺跡で見つかった掘立柱建物(約2,500年前)です。この遺跡が位置する低湿地では、木などの有機質遺物が残りやすく、柱そのものが発見されました。規模は長軸7.2m、短軸2.7mです。この建物は2つの空間を持ち、写真右側の六角形部分が居間・寝室部分、左側が台所部と出入口。これは積雪期の居間・寝室の熱効率を高めるために出入口部を分離したものと考えられ、縄文人の高い知恵がうかがえます。(坂上有紀)



竪穴住居(蛇谷遺跡)



掘立柱建物(青田遺跡)



### <参考文献>

宮本長二郎 2004「第七章 まとめ 1 青田遺跡の住居と集落」『第133集 青田遺跡』財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会(掘立柱建物の復元図は宮本氏案による。)

金関 恕・春成秀爾編 2005『衣食住の考古学』岩波書店

藤田勝也・古賀秀策編 1999『日本建築史』昭和堂

## 県内の遺跡・遺物52

しもこう  
下国府遺跡 (昭和51年 国指定)

遺跡所在地：佐渡市竹田字畑田317-7ほか

下国府遺跡は、<sup>くになか</sup>国中平野の南端、小佐渡山地から平野に突き出たように伸びる丘陵先端に立地する奈良時代から平安時代にかけての遺跡です。古代の交通路を書いた『延喜式』に、「佐渡国駅馬、松崎・三川・雑太各五疋」とあり、越後渡部から佐渡にはいて、佐渡<sup>こくふ</sup>国府に至るまでに三つの駅家があったことになっています。この記録されている古道は、佐渡の東南部松崎（旧畑野町）から小佐渡山地を抜けて国中平野に通じ、下国府遺跡付近を通っていたと推定されています。

昭和50年の調査で、二重の溝に囲まれた中に、2間×5間の<sup>ほったてばしらたてもの</sup>掘立柱建物2棟が、南北に並んで検出されました。溝から須恵器の瓶や杯などが出土しました。

この特殊な遺構配置や遺跡周辺の地名が「にいこう」と言われていることから、これを「新国府」と解釈し、ほかの場所にあった国府（古国府）をここに移転して「新国府」としたと推定する説があります。そのため、下国府遺跡は<sup>かんが</sup>官衙もしくは役人の官舎跡などの性格が想定されています。

近年では、東京都府中市の武蔵国府関連遺跡のように、溝に区画された中に2棟並立する掘立柱建物の遺構が全国で多く発見され、下国府遺跡も同様の遺構があることから、古代の神社遺構ではないかという説が検討されています。

今後佐渡の古代の様相を確認していくために、重要な遺跡です。

(写真・資料提供 佐渡市教育委員会)



調査当時の遺跡



現 状



近景 (南から 後方の山は金北山)

## 埋文にいがたNo.54

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒956-0845 新潟市金津93番地1  
TEL (0250) 25-3981  
FAX (0250) 25-3986  
e-mail : niigata@maibun.net  
URL : http://www.maibun.net  
印刷 阿部印刷株式会社